

曹魏における「才性四本論」の展開

高橋 康 浩

[Abstract](#)

はじめに

後漢末から三國時代にかけて人物評論が隆盛し、同時にこれは君臣間に人事をめぐる對立を惹起した。特に曹操が提示した唯才主義は、漢代の人材登用のあり方を大きく揺るがすものであった。曹操は登用の際に才能と性行を切り離す見解を打ち出し、後漢の一般的な官僚登用法である孝廉を否定したのである。これはやがて儒教官僚層の批判を受け、合わせて人物評價における理論の整理が進められた。その成果の一つが、人間の實用的な才能である「才」と道徳的な素質である「性」との關係を論じた「才性四本論」であった。唐長孺(一九五五)は、「才性四本論」が實際政治に關わる命題であり、曹魏政權の強化を目的とするものと主張した。⁽¹⁾一方で、岡村繁(一九六二)はかかる唐の説に反駁し、「才性四本論」が當時の權力闘争の中で生み出された派閥的討論であり、やがて實際政治とは離れた哲學論として行われたと推測する。⁽²⁾

かかる先行研究を踏まえて、本稿は「才性四本論」の成立に關わった傳説・鍾會らの才・性に對する認識、および他者への人物評價の内容を手掛かりとして、當時の曹魏政權内における才性論の展開を整理し考察するものである。これを明らかにすることで、後漢末以降に陸續と著された人物評論における「才性四本論」の位置づけを把握できよう。

一、唯才主義の否定と「才性四本論」

後漢末から「才性四本論」の登場に至るまでの才性論の経緯については、安東諒(一九七二)が詳しく述べているが、⁽³⁾行論上の前提として踏まえておきたいので、本稿でもおおよそ整理しておく。

漢代では官僚登用制度として郷舉里選が行われた。郷舉里選にはいくつかの科目があり、中でも孝廉を常舉とする。名稱からも分かるとおり、これは儒教的な性行・徳性による評價を基準として人を推舉する制度である。だが、後漢が衰退し、建安年間になって曹操が政治の實權を掌握すると、新たな登用方針を唱えた。

十五年春、令を下して曰く、「古より受命及び中興の君、曷ぞ嘗て賢人・君子を得て、之と共に天下を治めざる者あらんや。其の賢を得るに及ぶや、曾ち閭巷を出でずんば、豈に幸ひに相遇はんや。……若し必ず廉士にして而る後に用ふ可くんば、則ち齊桓は其れ何を以てか世に霸たる。今天下に褐を被て玉を懷きて涓濱に釣る者有ること無きを得るか。又た嫂を盗み金を受けて未だ無知に遇はざる者無きを得るか。一三子は其れ我を佐けて仄陋を明揚し、唯だ才是れ舉げよ。吾得て之を用ひん」と(『三國志』卷一 武帝紀)。⁽⁴⁾

建安十五(二二〇)年、曹操は、才があれば太公望のごとく貧しい身なりの釣り人であっても、陳平のごとく嫂と密通して賄賂を受け取るうとも登用することを明言した。いわゆる唯才主義である。漢代の孝廉は、「儒教的性

行を備えていれば、官僚としての能力を有する」という前提に基づき、才能と性行は結びつくという考え方であった。曹操はこの兩者の結びつきを切り離そうとした。渡邊義浩（一九九五）が指摘するように、曹操の唯才主義は孝廉の否定であり、漢の正統性を支えていた儒教に打撃を与えた。⁽⁵⁾かかる曹操の方針は、儒教を価値観の中心に置く官僚層にとって座視できぬものであった。

延康元（二二〇）年に曹操が没して漢魏革命が起ると、九品中正制度が成立し、人物評價の内容が仕官希望者の官僚生活に直結するようになった。九品中正制度では儒教的性行が再び人事に影響力を持つことになる。⁽⁶⁾これに伴い、當時の知識人たちは、恣意的であった人物評價の理論を整理しつつ、才を優先する曹操の人事基準を攻撃した。後漢の大儒盧植の子にあたる盧毓はその一人であり、人事において才と性の優先順位をつけることを主張する。また盧毓は明帝曹叡期に人事を統括する吏部尚書に就いた人物でもある。

會々司徒缺け、毓處士の管寧を擧ぐるも、帝用ふる能はず。更めて其の次を問ふに、毓對へて曰く、「敦篤至行なれば、則ち太中大夫の韓暨。亮直清方なれば、則ち司隸校尉の崔林。貞固純粹なれば、則ち太常の常林」と。帝乃ち暨を用ふ。毓人を選擧するに及び、先づ性行を擧げ、而る後に才を言ふ。黃門の李豐嘗て以て毓に問ふ。毓曰く、「才は善を爲す所以なり。故に大才は大善を成し、小才は小善を成す。今之を才有りと稱するも、而るに善を爲す能はざれば、是の才器に中らざるなり」と（『三國志』卷二十二 盧毓傳）。⁽⁷⁾

明帝曹叡より人事の諮問を受けた盧毓は、缺員となった司徒の後任候補を幾人か推薦し、才能よりも性行を優先する方針をとった。才は善を爲すためのものであり、善を爲すことができなければ、その才は役に立たないというのである。この時に推薦した管寧・崔林らは、盧毓・司馬懿とともに「北海グループ」に屬する。つまり、盧毓は性行優先の人事を行って司馬氏派の利益を圖りつつ、曹操の唯才主義を否定したのである。才性の議論は現實の人事に關わっており、強い黨派性を有していた。⁽⁸⁾ちなみに盧毓に人事のあり方を尋ねた李豐は、後述のとおり「才性四本論」において「異」の立場をとる。

おそらく曹操の唯才主義を踏襲して才を優先する人物であったのだろう。人事において才と性をどのように扱うかという問題は、後漢末以降たびたび論じられてきた。

明帝が崩御すると、後事を託された曹爽は司馬懿と對立し、司馬氏派の盧毓に代わって何晏を吏部尚書に就ける一方、玄學を基準とする人事を行う。こうした曹氏派と司馬氏派の政治闘争、人事をめぐる對立の流れの中で成立したものが「才性四本論」であった。

『世說新語』文學篇は、鍾會が「才性四本論」を著した逸話を收める。その劉孝標注に、⁽⁹⁾

魏志に曰く、「鍾會才性の同異を論じ、世に傳へらる。四本なる者は、才性の同、才性の異、才性の合、才性の離を言ふなり。尚書の傳嘏は同を論じ、中書令の李豐は異を論じ、侍郎の鍾會は合を論じ、屯騎校尉の王廣は離を論ず。文多くして載せず」と。

とある。「才性四本論」は、才と性との關係を、「同」「異」「合」「離」の立場より論じたものである。論の現物を見た劉孝標がその文章を收載しなかったため、全容を知ることはいきない。注（一）所掲青木著書は、「同」は才性が同一のもの、「異」は二者が異なるもの、「合」は一致するもの、「離」は一致しないもの、という立場より論じたものとする。かかる説および注（一）所掲唐論文・注（二）所掲岡村論文を踏まえつつ、注（二）所掲渡邊論文は、「同」は才と性とを同一概念の異稱とし、「異」は才と性とを本來別物とし、曹操の唯才主義と同質のものと捉え、「合」はもともと別物の才と性が合致するようになるとし、「離」は才と性とは乖離した方向をとるものと整理する。また、「合」「離」をそれぞれ「同」「異」の發展型と見るが、首肯し得る見解である。

冒頭で述べたように、「才性四本論」に關しては唐長孺と岡村繁の議論があり、兩者によつて概ね考察されている。要點を整理すると、唐は、魏晉間に行われた才性論が空談ではなく、實際政治から出發して實際政治に歸着する命題であり、その目的が新興の曹魏政權を強化するためのものと結論づける。一方、岡村は、才性の「同」「合」を主張する傳嘏・鍾會が司馬氏派、

才性の「異」「離」を主張する李豊・王廣が曹氏派であること踏まえ、かかる陰惨な内紛が生み出した派閥的討論であると論じ、「傳嘏らの才性論は、たとえ當時の選舉から論のきつかけを得、實際の政局を背景に生れてきたとはいえ、それに對する論者の姿勢およびその内容は、すでにかかる實際政治から離れて純粹な哲學論（玄談）として行われた」と推測する。曹氏派と司馬氏派の政治鬭争の中で生み出されたという岡村の主張には賛同するが、純粹な哲學論として行われていたという主張には疑問も残る。そこで「才性四本論」に關わった人物たちの才・性の捉え方、および彼らの他者に對する人物評價の内容から、この點を検討してみたい。

二、傳嘏と鍾會の人物評價

「才性四本論」を文章としてまとめたのは鍾會だが、議論を主導した人物は傳嘏であつた。『三國志』卷二十一 傳嘏傳に、「嘏常に才性の同異を論じ、鍾會集めて之を論ず（嘏常論才性同異、鍾會集而論之）」とあり、また同傳注引『傳子』に、「嘏既に治に達し正を好み、而して清理識要有り。好みて才性を論じ、精微を原ね本づき、能く之に及ぶもの鮮し（嘏既達治好正、而有清理識要、好論才性、原本精微、鮮能及之）」とあるように、常日頃より才性を論ずることを好んだという。注（2）所掲岡村論文は「才性四本論」の編纂時期を、曹氏派と司馬氏派の權力鬭争が激しくなる嘉平元（二四九）年から嘉平三（二五二）年ごろと推定する。だが論の成立を待つまでもなく、それ以前から四つの立場は四者によつて論じられていたようである。

「同」論を唱える傳嘏は、劉劭を批判する中で才性に言及している。劉劭について、多田狷介（一九八〇）¹⁰⁾はその交遊關係や政治的位置を考察し、曹氏派の法術的官僚と位置づける。また、多田の見解を肯定的に繼承した東川祥丈（二〇〇三）¹¹⁾も劉劭を法家重視の官僚と捉え、その法治の特徴を論じた。これらを踏まえれば、劉劭は曹氏派に近い立場であつたのだろう。傳嘏は劉劭の編纂した『都官考課』を批判する際に次のように述べた。

時に散騎常侍の劉劭考課法を作るや、事は三府に下さる。嘏劭の論を難じて曰く、「蓋し聞くならく、帝制は宏深にして、聖道は奥遠なり。」

……昔先王の才を擇ぶや、必ず行を州閭に本づき、道を庠序に講ず。行具はれば而ち之を賢と謂ひ、道脩むれば則ち之を能と謂ふ。郷老は賢能を王に獻じ、王拜して之を受く。其の賢者を擧ぐるや、出して之に長たらしめ、其の能者を科するや、入りて之を治めしむ。此れ先王の才を收むるの義なり。方今、九州の民より、爰に京城に及ぶまで、未だ六郷の擧有らず、其の選才の職は、専ら吏部に任ず。品狀を案ずれば則ち實才は未だ必ずしも當らず、薄伐を任ずれば則ち德行は未だ敍と爲さず。此の如くんば則ち殿最の課、未だ人才を盡くさず。王度を述綜し、國式を敷贊するは、體深く義廣くして、得て詳かにし難きなり（『三國志』卷二十一 傳嘏傳）¹²⁾。

古の先王は郷里での性行を人事の基準とし、それを具えていれば賢者として登用したという。つまり、性と才は結びつくものながら、まず性行があつて後に才能が伴うという考え方である。かかる先王の例を引き合いに出す一方、傳嘏は「品狀」を勘案すれば「實才」が必ずしも適當でなく、「薄伐」に基づけば「德行」は問題にされないとも説く。渡邊義浩（二〇〇六）¹³⁾が述べるとおり、「品狀」とは德行により規定される「品」と、才能と德行の兩方を記した「狀」を合わせたものであり、「薄伐」は「簿伐」ともいい、父祖や本人の官歴を記したものである。さらに渡邊は、傳嘏が實才と德行を對照的に扱っており、漢代の孝廉のように人の善性が官僚として能力が高いのかという曹操の問題提起がここに見られることを指摘する。こうした傳嘏の主張が具體的な政治發言として表れたものとして、何晏・鄧颺・夏侯玄への人物評價を擧げることができる。

是の時、何晏材辯を以て貴戚の間に顯はれ、鄧颺變通を好み、徒黨を合はせ、聲名を閭閻に響ぐ。而して夏侯玄貴臣の子たるを以て少くして重名有り、之を宗主と爲す。交を嘏に求むれども納れざるなり。嘏の友人の荀粲、清識遠心有れども、然るに猶ほ之を怪しむ。嘏に謂ひて曰く、「夏侯泰初は一時の傑なり。……二賢睦まじからざるは、國の利に非ず。此れ蘭相如の廉頗に下る所以なり」と。嘏之に答へて曰く、「①泰初は志其の量より大きく、能く虚聲を合めども實才無し。何平叔は

言遠くして情近く、辯を好みて誠無し。所謂、利口にして邦國を覆すの人なり。鄧玄茂は爲す有りて終無く、外に名利を要め、内に關鑰無し。同じきを貴び異なるを惡み、言多くして前を妒む。言多ければ豊多く、前を妒めば親しみ無し。②吾を以て此の三人の者を觀るに、皆敗德なり。之を遠ざくるも猶ほ禍の及ばんことを恐る。況んや之に昵づくをや」と(『三國志』卷二十一 傳嘏傳注引『傅子』)

引用文冒頭の「是の時」とは曹爽輔政期にあたる。當時、傳嘏は何晏・鄧颺・夏侯玄らと交わらず、友人の荀彧から交際を薦められても拒否した。そもそも何晏らは曹氏派、傳嘏は司馬氏派に位置づけられる。①にあるとおり、傳嘏は夏侯玄を「虚聲を合めども實才無し」と評し、才を有し辯舌に長けると貴戚の間で評判の何晏を「辯を好みて誠無し」と評し、②では、鄧颺を含めていずれも「敗德」と斷じた。とりわけ夏侯玄に對しては、劉劭への批判と同じく才と德とを絡めて論じている。彼らへの人物評論は時期的に「才性四本論」完成前であり、これが「同」論の雛型であろう。

一方、「合」論の鍾會による人物評價は、『三國志』卷二十三 裴潛傳注引『晉諸公贊』に確認できる。⁽¹⁶⁾

(裴) 康は弘量有り、(裴) 綽は明達を以て稱と爲す。(裴) 楷少くして琅邪の王戎と俱に據と爲りて名を發す。鍾會之を大將軍の司馬文王に致して曰く、「裴楷は清通、王戎は簡要」と。文王即ち辟して據と爲し、進みて顯位を歷す。

河東聞喜出身の裴楷と琅邪臨沂出身の王戎は同等の名聲を有していた。その兩者を司馬昭に推薦する際、鍾會は裴楷を「清通」、王戎を「簡要」と評した。裴楷への評價は、儒教的價值觀の典型である清廉な人柄を示す「清」、そして事理に通ずる能力を示す「通」というものであり、王戎への評價に見える「簡要」も、あつさりとした性行を示す「簡」と、事理において要領を得る「要」という構成となっており、性行+才能という表現形式を取りながら、評價對象者の姓名を含めて四言でまとめている。⁽¹⁷⁾ 蔭森健介(一九八二)は、『三國志』や『晉書』に見られる人物評語の内容を整理・體系化しており、「清」「簡」「和」「平」「寛」の五字が當時の貴族たちの任官以前における性

行才德を表現する語としても頻繁に用いられ、「貴族個人の具うべき人格性をも表現するもの」と述べる。さらに「清」「簡」については、要點のみを衝いたすつきりした政治、官府の出費を抑えた簡素な政治と捉え、かかる政治は「清」「簡」という貴族の理想とすべき人格性を帶びた官僚によつてなされるという。⁽¹⁸⁾ つまり、官僚個人の態度や資質を指すとともに、政治のあり方を表現する語でもあつた。人間の才と性が合致するという鍾會の「合」論もまた、唯才主義を否定する價值觀と言える。

これら「同」「合」論の二人に對して、「異」の李豐、「離」の王廣による人物評價は不詳である。ただ、「異」論の李豐は、一で述べたように、性を優先する虚毓に對して人事のあり方を尋ねていたことから、曹操の唯才主義を肯定したのである。一方、王廣は傳嘏らと才性を論じたことは分かっているが、その具體的な議論を伺い知ることはできない。

以上を整理すると、「才性四本論」における「同」の立場をとる傳嘏は、實才と德性を對照的に捉え、何晏・夏侯玄らを評價する中で、兩者の結びつきを重視した。また「合」の立場をとる鍾會は、實際の人事に關わる場において、性行と才能を合わせた評語を以て人物を評價した。傳嘏・鍾會の當時、「才性四本論」に基づく人物評價は、岡村が述べるような哲學論ではなく、實際政治の場で利用されたと見るべきであろう。⁽¹⁹⁾

三、傳玄の「同」

「才性四本論」に見られる主張は、曹魏人士の間でどのように受け取られていたのだろうか。その解を探り得る人物の一人が傳玄である。當時、傳玄は傳嘏・鍾會のように司馬氏派に屬し、才性について論じていた。傳玄は傳嘏と本貫を同じくし、自著の『傅子』に傳嘏の傳記を著した人物でもある。想像を逞しくすれば、傳玄は傳嘏と才性論を交わしたとも考えられる。ともあれ、その傳玄の主張を見ていきたい。

①虎は至猛なれば、畏れて服す可し。鹿は至粗なれば、教へて使ふ可し。木は至勁なれば、柔らかくして屈げる可し。石は至堅なれば、消して用ふ可し。況んや人の五常の性を含み、善有れば因る可く、惡有れば改む

可き者をや。人の重んずる所、身より重きは莫し。貴教の道行はるれば、士は節に仗りて義を成し、死して顧みざる者有り。此れ先王の善に因りて義を教へ、義に因りて得を立つるなり。……②夫の商・韓・孫・呉の若きは、人性の得を貪り進を樂しむを知らず、其の善を兼濟するを知らず、是に於て之を束ぬるに法を以てし、之を要むるに功を以てし、天下をして唯だ力をば是れ待み、唯だ争ひをば是れ務めしむのみ。力を持み争ひに務め、湯を採りて火に赴きて、其の身を忘るる者有るに至りては、利を好むの心をば獨り用ふるなり。人利を好むの心を懷けば、則ち善端沒せり（『羣書治要』卷四十九引『傳子』貴教篇²⁰）。

①虎・鹿・木・石はそれぞれの特徴を踏まえて用いるように、人も五常という儒教的徳性を含みつつ善惡に揺れるからこそ教化が重要であることを説く。この部分は王充『論衡』率性篇の、「夫れ鐵石の天然すら、尚ほ鍛鍊を爲す者は故質を變易す。況んや人の五常の性を含むをや（夫鐵石天然、尚爲鍛鍊者變易故質。況人含五常之性）」とあるのに基づく。②では、商鞅・韓非・孫武・呉起ら春秋戰國時代の重法主義者たちの性に對する理解を批判する。傳玄は人に善性の具わることを述べ、また引用部分末尾にて「善端」と記していることから、ここは孟子の性善説・四端を踏まえた議論を展開した。一方で、傳玄は次のようにも述べる。

人の性は水の如し。之を圓に置けば則ち圓なり、之を方に置けば則ち方形なり、之を澄ませば則ち渟まりて清み、之を動かせば則ち流れて濁る。先王中流の擾亂し易きを知り、故に隨ひて之を教ふ。其の偏好する者を謂ふ、故に一定の法を立つ（『意林』卷五引『傳子』²¹）。

人の本性は水のように、置かれた場所によつて圓形にも方形にもなり、清みも濁りもする。古の王たちはこれを理解していたからこそ「中流」、すなわち中人を教化したと述べ、先王に假託して傳玄は自らの見解を提示する。中人のみが善にも惡にも變わり得るという議論は、言うまでもなく性三品説に基づく。前引の『傳子』貴教篇を含め、傳玄は主流となつていた儒家の性説に則り、その枠組みから外れるものではない。かかる認識を持つ傳玄は才についても言及した。それが次の文である。

凡そ才を品するに九有り。一に曰く徳行、以て道の本を立つ。二に曰く理才、以て事機を研ぐ。三に曰く政才、以て制體を經む。四に曰く學才、以て典文を綜ぶ。五に曰く武才、以て軍旅を御す。六に曰く農才、以て耕稼を教ふ。七に曰く工才、以て器用を作す。八に曰く商才、以て國利を興す。九に曰く辯才、以て諷議を長ず（『長短經』量才篇引『傳子』²²）。

傳玄は才を論ずる中で、徳行を筆頭に九種類挙げた。高新民（一九九五）はこれを九品中正制度の否定と見る²³。そもそも九品中正という名稱にも含まれる「品」とは先天的・生まれつきの性質、すなわち「性」を指し、董仲舒學派の性三品説に基づくという²⁴。それを後天的かつ可變の「才」と合わせて評價し登用するのがこの制度であつた。『傳子』を見ると、傳玄は九つの具體的な才を論ずる中で「徳行」という本來は性に屬するものを第一に挙げ、道の根本を立てるものと位置づけた。つまり才と性（品）が結びつくもの、さらに言えば同一のものという見解である。かかる傳玄の主張は「才性四本論」における「同」論に相當し、傳玄と立場を同じくする。傳玄は「同」に基づき、九品中正制度の修正案を示した。才と性の議論は人事に繋がる極めて政治的なものであり、傳玄は傳玄の「同」論だけでなく、曹・司の權力闘争の過程で生まれた「才性四本論」が有していた政治性も繼承していたのである。

四、嵇康・呂安の議論

傳玄とほぼ同時期の人物であり、「才性四本論」に基づく主張を展開したとされるのが嵇康である。嵇康は曹操の孫の長樂亭主（沛穆王曹霖の娘）と婚姻關係を結んでいたこともあつて、政治的には曹氏派に位置づけられる。嵇康は「才性四本論」に關して鍾會と因縁があつた。

鍾會 四本論を撰し、始めて畢る。甚だ嵇公をして一見せしめんと欲し、懷中に置き、既に定まりて、其の難を畏れ、懷にして敢て出さず、戸外に於て遙かに擲ち、便ち面して急ぎ走る（『世說新語』文學篇²⁵）。

鍾會は「才性四本論」を嵇康に見せようとして出向いたが、直前になって批判を怖れ、ついに意から投げ入れて逃げるように歸つたという。嵇康自身は「才性四本論」編纂に直接關與していないが、それに關わる論を言及した

ものとして「明・膽論」がある。「明・膽論」は、呂安（呂子）と嵇康（嵇先生）が人間の明と膽について議論を交わしたものである。執筆時期は不詳だが、嵇康と鍾會の因縁および後述のとおり性三品説との關わりを勘案すれば、「才性四本論」の議論の影響があつたことは十分考へ得る。では、「明・膽論」の内容を検討してみたい。⁽²⁶⁾

① 呂子なる者有り、義を精し道を味し、是非を研核す。以爲へらく、人に膽有りて明無かる可きも、明有れば便ち膽有り。嵇先生以爲へらく、明・膽は用を殊にし、相生する能はずと。論に曰く、「② 夫れ元氣は陶鑠し、衆は生まれながらにして焉を稟く。賦受するに多少有り、故に才性に昏明有り。唯だ至人は特に純美を鍾め、外内を兼周し、畢く備へざること無し。此れを降る已往、蓋し闕如するなり。或いは見物に明あり、或いは決斷に勇あり。人情に貪廉あり、各々止むる所有り。諸を草木に譬へ、區するに別を以てす。之を兼ねる者は物に博く、偏受する者は其の分を守る。故に吾謂へらく、③ 明・膽は氣を異にし、相生する能はずと。明は以て見物し、膽は以て決斷す。明を専らにして膽無くんば、則ち見ると雖も斷ぜず。膽を専らにして明無くんば、則ち理に違ひて機を失ふ。④ 故に子家は軟弱にして、弑君に陷る。左師は斷ぜずして、華臣に逼らる。皆智は之に及べども、決して行はざるなり。此の理坦然として、宣滯する所に非ず。……」⁽²⁷⁾と。

①は兩者の持論である。呂安は、膽があつて明のないことはあつても、明があれば膽もあるとして、明が膽を規定すると捉える。嵇康は、兩者がはたらきを別にし、一方が他方を生ずるものではないとする。かかる嵇康の主張は論中に繰り返し述べられており、高田淳（一九五〇）はそこに「才性四本論」における「離」の雛型を看取する。⁽²⁸⁾注（26）所掲西譯注は高田の論を肯定し、大上正美（二〇一六）もその見解を踏襲している。⁽²⁹⁾②から嵇康の本論である。人は生まれながらに受ける氣の量により才・性に明暗ができるとし、完全なる明・膽を兼備する至人とそれより劣る中人以下の存在を説く。これは王充の『論衡』率性篇を踏まえており、⁽³⁰⁾また董仲舒學派の性三品説に基づく。③では、明と膽が氣を異にし、一方が他方を生ずることはないとして、冒頭の

内容を再び提示する。明は物を見る聰明・明智を、膽は決斷し行動に結びつく膽力を指し、兩者が各々はたらき、一方だけでは失敗もあると述べる。④はその具體的事例として、春秋鄭の公子家と春秋宋の左師（向戌）が、ともに十分な智慧を持ちながら決斷を誤った逸話を示す。

この議論を「才性四本論」と絡めてみると、そもそも注（28）所掲高田論文が雛型を看取したという「離」論は、才と性が乖離した方向を取るとする論である。明智はともかく、膽力により爲される行動が必ずしも道德的素質に基づく性行とは規定されていないが、明・膽を才・性に當てはめてみれば、嵇康が兩者を別物と繰り返す點は、「離」論よりも、その發展前の段階である「異」論と言うべきであろう。

かかる嵇康の主張に對し、呂安もまた過去の人物を例に擧げて反論した。漢の賈生、切直の策を陳べ、危言の至を奮ふ。行ひの疑ひ無きは、明の察する所なり。鵬を忌みて賦を作るは、暗の惑ふ所なり。一人の膽、豈に盈縮有らんや。蓋し見ると見ざる、故に行ひの果否有るなり。⁽³¹⁾

前漢の賈誼が果敢であつたり惑つたりしたのは、見・不見という明のはたらきで行動が分かれたのであり、人の膽に盈縮がないことを述べる。とすれば、呂安は膽を先天的かつ不變なものと捉えており、これは才性論の性に相當しよう。この他にも呂安は、自らの首を荊軻に差し出した戰國時代の樊於期、息子の眼前で劔に伏した前漢の王陵の母などを擧げ、明が膽を引き起こし、明がなければ膽だけで自分を守り抜くことはできないと論じた。注（29）所掲大上論文の表現を借りれば、「明の膽に對する絶対的優位を例證」しており、呂安の解釋は、才を優先する唯才主義と同質のものである。その呂安への再反論として、嵇康は次のように説く。

夫れ性情を論理し、異同を折引するに、固より當に受くる所の終始を尋ね、氣分の由る所を推すべし。……①本と二氣は同じからず、明は膽を生ぜざるを論ず。之を極論せんと欲すれば、當に一人をして刺諷の膽無からしめて、事を見るの明有らしむべし。故に當に不果の害有るべし。中人は血氣之無く、而して復た之を資するに明を以てするを謂ふに非ず。二氣一體に存すれば、則ち明は能く膽を運らす。賈誼は是れなり。

②賈誼の明膽は、自づから相^{をさ}經むるに足り、故に能く事を濟す。誰か殊に膽無きも、獨り明に任せて以て事を行ふ者を言はんや。子獨り自ら此の言を作りて、以て其の論を合はすなり。鵬を忌みて闇惑するは、明の周からざる所にして、何ぞ膽を害はん。③明は既に以て物を見、膽は能く之を行ふのみ。明の見ざる所、膽當に何をか斷すべき。進退相扶け、何ぞ盈縮を謂はん。就^{すなは}ち此の言の如くんば、賈生の策を陳ぶるは、明の見る所なり。鵬を忌みて賦を作るは、暗の惑ふ所なり。④爾爲^{かくのしたく}明の前に徹して、暗の後に惑ふは、明に盈縮有ればなり。苟くも明に進退有れば、膽も亦た何爲れぞ偏る可からざらんや。……夫れ唯だ至明は能く惑ふ所無く、至膽は能く虧く所無きのみ。苟くも此の若きに非ざるよりは、誰か弊損すること無からんや。……³²

①では、三たび明と膽が氣を異にし、明は膽を生じぬことを述べる。膽がなくて諷刺できずとも明を備える場合があり、膽がないことはあり得ないとする呂安の論を否定した。續けて、②賈誼の明と膽は、作用し合ったこととうまく事を成したのであって、膽がないのに明により成したのではないことを論じ、呂安の主張を退ける。③明が物を見、膽が行うものであるからには、明が見ないものを實行できるはずもない。膽を助ける明に進退があり、膽は盈縮しないとする。膽の盈縮については呂安と同じ見解だが、嵇康はさらに論を進めて、④明に進退・盈縮があれば、それに伴い膽も偏ると論じた。すなわち、明を後天的で可變なものとする一方、その明の作用によつては、膽もまた必ずしも不變ではないとしており、從來の才性論を踏まえる呂安の主張と異なる。そして嵇康は、たたみかけるように述べる。

子又た言へらく、「明に膽無きこと無く、膽は能く偏守す」と。子の言を案ずるに、此れ則ち專膽の人有り、亦た膽を爲すは特に自づから一氣なり。五才體に存し、各々生ずる所有り。明は陽を以て曜^{かがや}き、膽は陰を以て凝る。豈に陽有りて陰無かる可く、陰有りて陽無かる可しと謂ふ可けんや。相^ま須^すちて以て德を合はすと雖も、要^{かなら}ず自づから氣を異にするなり。……³³

明・膽は陽・陰のごとく、互いに缺くべからざる存在であり、兩者が德を

合わせて作用し、本來異なる二つが一つのはたらきをする。かかる主張は、別物の才と性が合致するようになる「合」論と言つてよい。このように、「明膽論」は、明と膽を個々に獨立した別物と捉える「異」論から、兩者が合わさつて一つのはたらきをする「合」論へと繋がっていく。また、明だけでなく膽も不變ではないという嵇康独自の思惟があつた。「才性四本論」における四論の一つに囚われず、それらを有機的に展開したところに、「明膽論」の特徴を伺うことができる。同時に、この嵇康と呂安の議論は實際政治と關わらぬ場で爲されており、「才性四本論」が哲學論へと變質する過程を示す一例である。

おわりに

後漢末、孝廉を否定して唯才主義を掲げた曹操は、人間の才と性を切り離して評價した。魏晉期に入つて九品中正制度が成立すると、才性の議論は引き續き展開され、「才性四本論」として一つの形が提示される。才性の「同」論を主張する傅嘏は、劉劭や夏侯玄らを批判する中で、實才と德行を絡めて論じた。また「合」論を主張の鍾會は、裴楷・王戎らを推薦する際に性行と才能とを組み合わせた評語を示した。すなわち、傅嘏・鍾會の主張は唯才主義の否定であり、さらにそこには強い黨派性を有していた。こうした「才性四本論」における四つの立場は、傅玄や嵇康も論じていた。傅玄はすでに主流となつていた儒家の性論たる性三品説を繼承し、傅嘏と同様に「同」論を唱え、九品中正制度の修正案を提示した。一方、嵇康は「明膽論」の中で、受ける氣の多少により人の持つ明・膽の程度に差が生じ、別々の氣によつて生じた明・膽とが相互に作用して、はたらきを爲していくことを論じた。ここには、「才性四本論」の「異」、そして「合」へと繋がる論の展開を看取できる。

權力闘争の過程で成立した「才性四本論」は、のちに政治から乖離した哲學論へ、そしてその評語の巧みさを競う遊び、いわゆる清談へと變質していく。東晉の孫盛は「清談亡國論」を著し、清談こそが西晉滅亡の原因となつたことを述べる。また『世說新語』文學篇には、東晉の殷浩が「才性四本論」

を以て相手をやり込めた逸話を載せる。だが、曹魏政權後半から末期にかけての「才性四本論」は十分に政治性を帯びており、また哲學論へと變わっていく過渡期でもあった。

注

- (1) 唐長孺「魏晉才性論的政治意義」(『魏晉南北朝史論叢』、三聯書店、一九五五年に所収)。また、唐長孺より先行して、青木正兒『支那文學思想史』(岩波書店、一九四三年)、『青木正兒全集』第一卷、春秋社、一九六九年に所収が「才性四本論」の特徴を整理している。
- (2) 岡村繁「才性四本論」の性格と成立―あわせて唐長孺氏の「魏晉才性論的政治意義」を駁す(『名古屋大學文學部研究論集』一八、一九六二年三月)。なお、唐と岡村の論争に對して、渡邊義浩は岡村の説に首肯しつつ、曹操の掲げた唯才主義という徳性と才能との一致を否定する價值觀を前に、「名士」が自らの人物評價を理論化する必要に迫られた過程で生まれたものとして「才性四本論」を位置づける。詳しくは、渡邊義浩「二史」の自立―魏晉期における別傳の盛行を中心として―(『史學雜誌』一一二―四、二〇〇三年四月)、『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所収を参照。
- (3) 安東諒「魏晉文學への一視點」(『廣島大學文學部紀要』三二―一、一九七二年一月)。
- (4) 十五年春、下令曰、自古受命及中興之君、曷嘗不得賢人君子與之共治天下者乎。及其得賢也、曾不出閭巷、豈幸相遇哉。……若必廉士而後可用、則齊桓其何以霸世。今天下得無有被褐懷玉而釣于涓涓者乎。又得無盜嫂受金而未遇無知者乎。二三子其佐我明揚仄陋、唯才是舉。吾得而用之(『三國志』卷一 武帝紀)。
- (5) 曹操の唯才主義については、渡邊義浩「三國時代における「文學」の政治的宣揚―六朝貴族制形成史の視點から―」(『東洋史研究』五四―三、一九九五年十二月)、『曹操の「文學」宣揚』と改題、改訂して、『古典中國』における文學と儒教、汲古書院、二〇一五年に所収に詳しい。渡邊は、曹操が唯才主義を宣布することにより孔融・荀彧・崔琰らを殺害して、儒教と「名士」層に揺さぶりをかけたことを指摘する。
- (6) 渡邊義浩「九品中正制度における「孝」」(『大東文化大學漢學會誌』四一、二〇〇二年三月)、『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所収によれば、「孝」を踏み外した者は、政治的な功績があろうと高い郷品を與えられなかったと論じている。
- (7) 會司徒缺、毓舉處士管寧、帝不能用。更問其次、毓對曰、敦篤至行、則太中大夫韓暨。亮直清方、則司隸校尉崔林。貞固純粹、則太常常林。帝乃用暨。毓於人及選舉、先舉性行、而後言才。黃門李豐嘗以問毓、毓曰、才所以爲善也、故大才成大善、

小才成小善。今稱之有才而不能爲善、是才不中器也。豐等服其言(『三國志』卷十二 盧毓傳)。

- (8) 盧毓については、拙稿「范陽の盧氏について―漢魏交代期の政治・文化―」(『東洋史研究』七五―一、二〇一六年六月)を参照。また「北海グループ」については拙稿でも論じているが、川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」(『史林』三三―四、一九五〇年八月)、「貴族政治の成立」と改題・改訂し、『六朝貴族制社会の研究』、岩波書店、一九八二年に所収に詳しい。
- (9) 「世說新語」文學篇に、「鍾會撰四本論。始畢、甚欲使嵇公一見。置懷中、既定、畏其難、懷不敢出、於戶外遙擲、便回急走」とあり、その劉孝標注に、「魏志曰、會論才性同異、傳於世。四本者、言才性同、才性異、才性合、才性離也。尚書傳殷論同、中書令李豐論異、侍郎鍾會論合、屯騎校尉王廣論離。文多不載」とある。
- (10) 多田狷介「劉劭とその考課法について」(『中嶋敏先生古稀記念論集』上巻、汲古書院、一九八〇年)、『漢魏晉史の研究』、汲古書院、一九九九年に所収。
- (11) 東川祥丈「劉劭『都官考課』とその批判をめぐって」(『中國思想史研究』二六、二〇〇三年十二月)。および東川祥丈「劉劭の法思想について―『人物志』の政治的分業論を手掛かりに―」(『東方學』一〇五、二〇〇三年一月)を参照。
- (12) 時散騎常侍劉劭作考課法、事下三府。殷難劭論曰、蓋聞帝制宏深、聖道奧遠。……昔先王之擇才、必本行於州閭、講道於庠序。行具而謂之賢、道脩則謂之能。鄉老獻賢能于王、王拜受之。舉其賢者、出使長之、科其能者、入使治之。此先王收才之義也。方今、九州之民、爰及京城、未有六鄉之舉、其選才之職、專任吏部。案品狀則實才未必當、任薄伐則德行未爲敘、如此則殷最之課、未盡人才。述綜王度、敷贊國式、體深義廣、難得而詳也。(『三國志』卷二十一 傅叡傳)
- (13) 渡邊義浩「九品中正制度と性三品説」(『三國志研究』一、二〇〇六年七月)。
- (14) 是時、何晏以材辯顯於貴戚之間、鄧颺好變通、合徒黨、鬻聲名於閭閻、而夏侯玄以貴臣子少有重名、爲之宗主、求交於叡而不納也。叡友人荀粲、有清識遠心、然猶怪之。謂叡曰、夏侯泰初一時之傑。……二賢不睦、非國之利、此蘭相如所以下廉頗也。叡答之曰、①泰初志大其量、能合虛聲而無實才。何平叔言遠而情近、好辯而無誠、所謂利口覆邦國之人也。鄧玄茂有爲而無終、外要名利、內無關鑰。貴同惡異、多言而妒前。多言多譽、妒前無親。②以吾觀此三人者、皆敗德也。遠之猶恐禍及、況昵之乎(『三國志』卷二十一 傅叡傳注引「傅子」)。なお、これとほぼ同様の逸話が「世說新語」識鑒篇に見える。
- (15) 引用文の出典となる「傅子」の著者傅玄は、司馬昭より男爵を賜與され、武帝司馬炎が西晉を建國すると子爵に昇り、「晉鼓吹曲」を作詞して西晉と司馬氏を正統化した司馬氏派の人物である。詳しくは、拙稿「傅玄「晉鼓吹曲」と西晉正統論」(『WASEDA RILAS JOURNAL』No. 5、二〇一七年十月)を参照。
- (16) 康有弘量、綽以明達爲稱、楷少與琅邪王戎俱爲掾發名、鍾會致之大將軍司馬文王曰、裴楷清通、王戎簡要。文王即辟爲掾、進歷顯位(『三國志』卷二十三 裴潛傳注

引『晉諸公贊』)。なお、裴楷と王戎を評價した逸話と評語そのものは、唐修『晉書』卷三十五 裴秀傳附裴楷傳にも收められている。

- (17) 「世說新語」賞譽篇には、「鍾士季目王安豐、阿戎了解人意。謂、裴公之談、經日不竭。吏部郎闕、文帝問其人於鍾會。會曰、裴楷清通、王戎簡要、皆其選也。於是用裴」とあり、同じく賞譽第八に、「王濬沖・裴叔則二人、總角詣鍾士季。須臾去後、客問鍾曰、向二童何如。鍾曰、裴楷清通、王戎簡要。後二十年、此二賢當爲吏部尚書、冀爾時天下無滯才」とあり、裴楷・王戎を評價した類似的逸話を載せる。
- (18) 荻森健介「清簡」と「威惠」——魏晉官僚の一考察——(『名古屋大學東洋史研究報告』八、一九八二年十一月)。

- (19) ただし、唐も岡村も指摘するように、「才性四本論」がやがて知識人や貴族たちの哲學論へと變質するのは事實である。かかる變質はおそらく三國時代より後である。これに關連して、『世說新語』における状態の變質および表現形式の變化を論じたものに、渡邊義浩「世說新語」における人物評語の展開(『六朝學術學會報』一七、二〇一六年三月)がある。

- (20) ①虎至猛也、可畏而服。鹿至粗也、可教而使。木至勁也、可柔而屈。石至堅也、可消而用。況人含五常之性、有善可因、有惡可改者乎。人之所重、莫重乎身。貴教之道行、士有仗節成義死而不顧者矣。此先王因善教義、因義而立得也。……②若夫商韓孫吳、知人性之貪得樂進、而不知兼濟其善、於是束之以法、要之以功、使下唯力是恃、唯爭是務。恃力務爭、至有探湯赴火、而忘其身者、好利之心獨用也。人懷好利之心、則善端沒矣。(『羣書治要』卷四十九引「傅子」貴教篇)

- (21) 人之性如水焉、置之圓則圓、置之方則方、澄之則淨而清、動之則流而濁。先王知中流之易擾亂、故隨而教之、謂其偏好者、故立一定之法。(『意林』卷五引「傅子」)。
- (22) 凡品才有九。一曰德行、以立道本。二曰理才、以研事機。三曰政才、以經治體。四曰學才、以綜典文。五曰武才、以禦軍旅。六曰農才、以教耕稼。七曰工才、以作器用。八曰商才、以興國利。九曰辯才、以長諷議(長短經「量才篇」引「傅子」)。

- (23) 高新民「論傳玄的政治思想」(『慶陽師專學報(社會科學版)』一九九五—四、一九九五年)。これに對して、拙稿「傅玄「傅子」の治國・人事思想」(『三國志研究』一二、二〇一七年九月)は、司馬氏派に與した傅玄による九品中正制度の修正案であることを論じた。

- (24) 注(13)所掲渡邊論文は、董仲舒學派が「春秋繁露」で性三品説を創設し、班固の『漢書』・王充の『論衡』を經、後漢末の荀悦に至つて人を九品に區別する思想が展開され、それが九品中正制度に反映されたことを論じている。

- (25) 鍾會撰四本論、始畢。甚欲使嵇公一見、置懷中、既定、畏其難、懷不敢出。於戶外遙擲、便面急走。(『世說新語』文學篇)。

- (26) 本稿に引く「明膽論」は、戴明揚校注「嵇康集校注」(中華書局、二〇一四年)を底本とした。また、「明膽論」の譯注には、西順臧「嵇康・明膽論(聰明と膽力の關係) および張叔遠・自然好學論(學を好むのは人の自然である)」、嵇康・難自

然好學論(學を好むのは人の自然である、への反論)の日語譯並びに註(『和光大學人文學部紀要』一四、一九八〇年三月)と大上正美「明(明知)と膽(膽力)の關係をめぐる論——嵇康「明膽論」和譯——」(『季刊創文』一〇、二〇一三年六月)があり、ともに参照した。

- (27) ①有呂子者、精義味道、研核是非。以爲人有膽可無明、有明便有膽矣。嵇先生以爲明、膽殊用、不能相生。論曰、②夫元氣陶鑠、眾生稟焉。賦受有多少、故才性有昏明。唯至人特鍾純美、兼周外內、無不畢備。降此已往、蓋闕如也。或明于見物、或勇于決斷。人情貪廉、各有所止。譬諸草木、區以別矣。兼之者博于物、偏受者守其分。故吾謂、③明膽異氣、不能相生。明以見物、膽以決斷。專明無膽、則雖見不斷。專膽無明、則達理失機。④故子家軟弱、陷于弒君。左師不斷、見逼華臣、皆智及之、而決不行也。此理坦然、非所宜滯。……

- (28) 高田淳「嵇康の「離」の立場」(『大倉山學院紀要』二一、一九五六年十月)。高田論文は「明膽論」を專論したものではないが、その他の論を含めた思想の展開より嵇康の「離」論の本質を探索。

- (29) 大上正美「明膽論」に見る嵇康の思惟の原型(『青山語文』四六、二〇一六年三月)。大上の關心は、「表現者としての(思想のはたらき(文學における思想性)」にあり、才性論との關わりについて論じたものではないが、示唆に富む。また、西順臧「嵇康の論の思想」(『集刊東洋學』一〇、一九六三年十月)、『中國思想論集』、筑摩書房、一九六九年に所収)は、「明膽論」を含めた嵇康の論を總合的に考察した。いずれにせよ、本文で觸れたとおり、西も大上も高田の説を踏襲する。

- (30) 「論衡」率性篇に、「人受五常、含五臟、皆具於身。稟之泊少、故其操行不及善人、猶或厚或泊也、非厚與泊殊其釀也、麴孽多少使之然也。是故酒之泊厚、同一麴孽。人之善惡、共一元氣。氣有少多、故性有賢愚」とあるのを踏まえる。

- (31) 漢之賈生、陳切直之策、奮危言之至。行之無疑、明所察也。忌鵬作賦、暗所惑也。一人之膽、豈有盈縮乎。蓋見與不見、故行之有果否也。

- (32) 夫論理性情、折引異同、固當尋所受之終始、推氣分之所由。……①本論「二氣不同、明不生膽、欲極論之、當令一人播無刺諷之膽、而有見事之明。故當有不果之害。非謂中人血氣無之、而復資之以明。二氣存一體、則明能運膽、賈誼是也。②賈誼明膽、自足相經、故能濟事。誰言殊無膽獨任明以行事者乎。子獨自作此言、以合其論也。忌鵬闇惑、明所不周、何害于膽乎。③明既以見物、膽能行之耳。明所不見、膽當何斷。進退相扶、何謂盈縮。就如此言、賈生陳策、明所見也。忌鵬作賦、暗所惑也。④爾爲明徹于前、而暗惑于后、有盈縮也。苟明有進退、膽亦何爲不可偏乎。……夫唯至明能無所惑、至膽能無所虧耳。苟自非若此、誰無弊損乎。……

- (33) 子又曰言明無膽、無膽能偏守。案子之言、此則有專膽之人、亦爲膽特自一氣矣。五才存體、各有所生。明以陽曜、膽以陰凝。豈可謂有陽可無陰、有陰可無陽邪。雖相須以合德、要自異氣也。……

The development of “Cai Xing Siben lun” in Cao Wei period

Yasuhiro TAKAHASHI

Around the end of the Later Han 後漢 Dynasty, character evaluation had gained popularity among the intellectuals. Subsequently, they constructed theories about it. One of those is “Cai Xing Siben lun 才性四本論”. Cai 才 is a person’s acquired talent, and Xing 性 is a person’s native qualities of virtue. The relationship of them were confused by Fu Xia 傅嘏, Zhong Hui 鍾會, Li Feng 李豐, and Wang Guang 王廣 in the Cao Wei 曹魏 period. They selected their respective theories, which are called “Dong” 同, “He” 合, “Yi” 異, “Li” 離.

Fu Xia was always discussing Cai and Xing. When He once evaluated the character of He Yan 何晏 and Xiahou Xuan 夏侯玄, he did it in contrast to their talent and virtue using the template of Dong’s theory. On the other hand, Zhong Hui also evaluated the character of Pei Kai 裴楷 and Wang Rong 王戎. His evaluation matched their talent and virtue as per He’s theory. However, Li Feng’s and Wang Guang’s evaluations are unknown. They probably evaluated a person based on the theories of Yi and Li.

Among these four theories, Fu Xuan 傅玄 developed Fu Xia’s argument/theory. He originally subscribed to the mainstream confucianism thought of Cai and Xing. With this in mind, Fu Xuan presented amendment of Jiupin Zhongzheng zhidu 九品中正制度. This is the distinguishing feature of his thought.

Furthermore, Ji Kang 嵇康 argued with Lu An 呂安, and presented his thought about Cai and Xing in “Ming-Danlun” 明膽論. In this argument, He recognized Ming and Dan as different things. When applying this to “Cai Xing Siben lun”, this conforms to Yi’s theory. But, Ji Kang insisted that Ming and Dan were mutually indispensable things. It is as per He’s theory. The organic development of the theory of “Cai Xing Siben lun” is a characteristic of Ji Kang’s thought.

After the Xi Jin 西晉 Dynasty, “Cai Xing Siben lun” became the theme of philosophical conversation among the aristocracy. However, it was still political and partisan until Cao Wei period.